



武田泰淳全集

第十五卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第十五卷

昭和四十七年七月二十五日 初版第一刷発行
昭和五十四年四月二十日 増補版第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—一九一

電話 東京(29)七六五—(営業)

東京(29)六七二—(編集)

振替 東京 六一四—一二三

印刷 株式会社 三 松 堂

製本 和田製本工業株式会社

第十五卷 目 次

日本の夫婦……………	3
宗教人の旅……………	132
大陸の舟あそび……………	134
文学者らしい告白……………	136
犬の裁判……………	137
生み出す者の苦心……………	138
「孫子」の兵法……………	139
おサルさんとみそ汁……………	141
コバルト色の雨合羽……………	142
国際的な人物……………	143
同級生交歓……………	144

E E Cと文学	145
文人歎語の図	146
中国女性の“女らしさ”	159
原稿料ゼロ	165
変りつつあるソ連	166
梅棹忠夫の忠告	172
実作者の経験談	173
悪魔好き	174
植物の根や昆虫の触角のごとく	175
花は土から	180
カンヅメ論	181
イカの夫婦	182
実業家の書いた本	183
農民の発言	186

おしゃべりは楽し	187
欲望の文学	188
主婦と外国語	189
おそろしい質問	190
テレビの新人	191
母の悲しみ	192
カイロの街で	193
こちらが研究不足	204
カイロの太陽と星	205
文学を志す人々へ	206
ひらけゆく北海道展	212
『森と湖のまつり』取材紀行	214
朝日ジャーナル編『日本の思想家(1)』	215
三島由紀夫著『美しい星』	218

作家の自己弁護	220
焼きもの	222
親鸞上人架空会见	224
「新しい世界」写真展	226
箱庭の美	227
強いということ	231
“北京・カイロ・モスクワ”	235
青年の宗教、老人の宗教	246
文章とテーマ	249
私の「中世」	252
ガーデンブリッジ附近	255
怪人二十面相	257
ソンをしなかった輜重兵	259
夫婦原始林を探検する	262

中国語のおもしろさ……………	269
梅崎春生著『狂ひ風』……………	272
枕山と毅堂……………	273
『序曲』について……………	276
悪書……………	277
本多秋五著『続物語戦後文学史』……………	279
批評家さまざま……………	280
宗教と文学……………	281
まじめな文士……………	282
作家の生き方……………	283
“文化望遠鏡”を……………	284
病氣と文学……………	285
私の書きたい女……………	286
はじめての本『司馬遷』……………	288

女傑なるかな……………	290
吳玉章『辛亥革命の体験』……………	291
親孝行……………	293
文学のアトランティス……………	294
めがね……………	296
椎名麟三氏について……………	298
かなしい動物……………	298
雨ニモマケズ……………	299
もうすこし平等に……………	300
中途はんぱ……………	301
文学者、政治を語る……………	302
酸素と化学肥料……………	303
日本的なるもの……………	304
中国現代劇の前進……………	305

静かに、ゆっくりと……………	308
作家の二代目……………	309
行動主義、今いずこ……………	312
「国際小説」とは……………	313
「紅樓夢展」の魅力……………	314
車上の批判者……………	316
巨大なるもの……………	317
狂った妻……………	318
別荘について……………	319
私の小説作法……………	320
何となくゾッとする……………	322
楽しいかな・筆談……………	323
めいめいの風景……………	324
心配する必要はない……………	325

忠勇なる諸氏よ……………	326
批評家にめぐまれる……………	329
井伏文学の魅力……………	331
コンピューターと経営者についての妄想と予感……………	331
日本人の国際感覚……………	340
花田清輝著『俳優修業』……………	342
石狩川……………	343
中国で感じたこと……………	349
丈夫な女房はありがたい……………	364
漱石の女性像……………	366
解 説……………本多秋五	369
解 題……………	377

評

論

5

本文中の写真・朝日新聞社提供

日本の夫婦

まず身近から

高井戸の公団アパートに居住していたころ、さくら咲く井之頭公園いのがほのほとりで、四組の夫婦が会合したことがある。おなじ武蔵野に住む、丸山真男、竹内好、埴谷雄高の三夫婦とぼくら。この四組は亭主も女房もたえず往来していたが、八人の男女が正面から顔をそろえて向きあつたのは、はじめてだった。買ったての八ミリのカラーフィルムで、のどかなる春景色と、好ましき学徒文人の貧乏くさい風流をうつし撮ったりして、けっこう楽しかったにしても、夫婦そろつてという集会は、どことなくぎこちなかった。神経のくばりかたが八方にらみになって、少しくこわばってくる。銀紙にくるんで蒸したニワトリの足など、われらにとっては豪華なる料亭の食卓を前にして、私は、その場の

わざとらしさを打ちやぶるため「まったく、われわれ夫婦はみんな、うまい具合にひつついたもんだなあ。うまく、くつついたもんだなあ」と発言した。

うまい具合に結合した組合せの妙は、そうやって標本をながめまわしていると、つくづく感じ入るものであった。それに、よく知りあつたお互いどうしでなければ、この種の微妙な感慨は生れるものではない。よくも、よくも、くつついたという、その「よくも」の意味は実に複雑をきわめているのであるから。

私の発言をきくと丸山真男は、いきなりプツと噴き出して笑いころげたのであった。「不思議なご縁」とか「ノミの夫婦」という言葉には、たしかに笑うよりほか仕方のないような、あまりにも神秘にして重大な意味がふくまれている。

丸山氏はハーバード大学に赴任して、今ごろはヨーロッパへまわり、四月にならなければ帰国しないだろうから、

そのあいだに語っておくわけではないが、また、若き政治学徒にとっては、ほとんど神様にちかいらしい秀才中の秀才たる彼に、生物学的な泥や、無頼の徒の唾をぬりつけるわけではないが、彼と食事をともにすると、彼の談論はたえまなくほとばしり、彼の箸はしきりに動いているが、はたして彼が真に料理の味がわかっているのか否か、疑問なのである。竹内好の方は、おでんを鍋から皿にうつす前に、皿をあためておくぐらいで、塩辛でも目刺しでも、野菜でも肉でも酒でも、やかましいぐらい味覚が発達している。丸山の方は「コレハびふてきデアリマス。コレハ天ぶらデアリマス」ぐらいは知覚しているだろうが、しゃべる方に熱中していて、要するに食物がいつのまにか口から胃へ移動してしまえばいいらしいのだ。

彼と親しくなったのは、伊豆山の岩波別荘に、ほとんど毎月自発的に二人ともカンづめになったためである。仕事をしないで、朝から晩までしゃべりつづけているので、ついには岩波の出版部や『世界』の編集部は、二人の滞在する日時を、すれちがいにさせるにいたった。別荘では、るすばんの中年婦人が、腕によりをかけた日本料理を出して下さる。しかし私は、丸山がそれらの料理を、うまいとかまずいとか批評したのをきいたことがない。彼は私を「泰淳氏」「和尚」「色即是空」「魍魅魍魎」などと呼び、昭和

文士特有のだらしのなさ、頭のわるさからかいたながら、もっぱら学術ならびに学者について紳士的に論じつづけるから、料理や女性、とりわけ友人の女房について論じているひまはない。

その彼が、若いころ映画女優の水戸光子さんが好きだったと言う。こちらが西洋の新しいタイプの女優さんの話を、これでもか、これでもかともちかけて言うてゐるうちに、うっかりそうもらしたわけだ。あとになって丸山邸を訪れ、夫人の顔を拝見したとき、私は「ハハア」と思った。夫人の顔は、若き日の水戸光子によく似ているからだ。男性の好みというものは、おそろしいものである。学生時代からの顔なじみである志賀高原の天狗の湯に、彼は今でもよく行く。高原の麓の宿から発音の彼を訪ね、高山植物の花々の風になびく高天原のあたりを歩いたとき、いささかロマチック、あるいは懐古的になった丸山氏は、婚約時代の奥さんとスキーを楽しんだときの話をきかせてくれた。若き日の彼は、奥さんのスキーも自分のと一しょにかついで、男性の体力のたのもしさを示したそう。肩から背にかけ袈裟がけに斬られたような、切開手術の痕のある現在とはちがひ、青春の法科学生には、そのくらいのサーブスは喜びであつたにちがいない。

私は大体において、友人の奥さんが苦手なのである。女

性というものをうまく取扱うのが絶対不可能であるという自信があつて、友人の夫人と同席すると腰のすわりがわるくなるような、くすぐったい、胸ぐるしい気分になる。

黒人歌手ベラフォンテが来日したとき、丸山家も私の家も、新聞社から切符を一枚ずつもらつた。丸山氏が来られないので、丸山夫人が代理で来て、私の隣の席にすわつた。あのベラフォンテという奴は、実に人心操縦のうまい男で、自分が歌うだけでなく、聴衆にも合唱させるようにしむけてくる。「オール・トゥゲザー・アゲイン」とか言つて、

声をそろえて二階、三階の客まで合唱させないと気がすまないのだ。最後に日本歌謡「さくら、さくら」になつた。

バナナ・ボートとちがい、日本語であるから、日本人ならだれでも歌えるはずだ。「さあ、ミナサン、歌いましょう」と、スポーツシャツの上半身もたくましく、ズボンの脚もはりきつてゐるベラ氏が、汗を顔面にしたたらせて、号令すると、ひかえ目な日本男女も歌いだした。私の隣の丸山夫人も、銀鈴をならす如く、高い声で、女学生のように歌い出した。それは、無邪気で、こたわりなくて、まことに好ましい歌い方であつた。しかし私は「どうして丸山の奴、今晩来なかつたんだろうなあ」と思案しつゝ、次第に身体がすくんできたのだつた。どうもノドにつつかえて、さく

丸山夫妻は、諸外国から一流の音楽士あるいは楽団がくれば、かならず夫婦仲良く聴きに行くのに、歌わせられる夜にかぎつて奥さんに同行しなかつた彼を、私はうらんだ。おまけに世界をまたにかけた黒人男の魅力は圧倒的で、こちらが蒼白きインテリ、黄色っぽい、男に思われてきて憂鬱である。帰りの自動車も拾わなければならぬ。スキークソかつがされていないが、夜の街で他人の奥さんをつたべれさせるわけにはいかない。ところが、いくら歩きまわつても、乗せてくれる車がない。あちこち方角を変えて、往きつもどりつするうち、一台走つてきたのでフルスピードで駆けよつた。というのは、別の連中も同じ車に向つて突つ走つていたからである。相手を押しのけて、ドアにしがみつかなかちで、やつと占領すると、奥さんもフルスピードで駆けつけた。そして「生存競争だわね」と言つて、彼女は乗りこんだ。私は、生存競争であろがなかるうが、とにかく無事に彼女を吉祥寺まで送り届けねばならない。私は、いかなる種類の女性でも、二人きりで同じ車にのるさいは、できるだけ離れて腰かける。そのときも、習慣でそうやった。丸山夫人は白か黒か忘れたが、夏の手袋をはめ、洋装だつた。ぼくらのような旧式な文士は、女性の洋装を描写するのが何よりめんどくさくて、青いとか白いと色彩ぐらしいか説明できない。とにかく夫人は、裾

のひろがる洋装だったので、なおのことその裾を私の尻の下に敷かぬよう注意した。彼女の心理の方は、ベラフォンテの歌声ならびに姿態にうばわれているだろうから、車中にいない「彼」にまかせておいたけれども。

まあそんな調子で、一步ふみこんで日本の夫婦を考察するには、私は不適任、絶望的にふさわしくないのである。

竹内家の玄関のガラス戸は、くもりガラスであるが、左側の一枚の左角だけ普通のガラスで、そこから来客の品定めのできる仕掛けである。その一角から竹内夫人の顔が半分ぐらい見えかかった瞬間、私は彼女の表情をすばやく観察する。

何でもズケズケと言つてのける、正直で一本気の竹内夫人は、口ぐせのように「武田泰淳はずるいわ」と批評する。数カ月会わないでいて、その批評が変化したかと思うと「やっぱり、よく考えたらタイジュンはずるいわ」と、つぶやいている。私が『風媒花』に中国文学研究会の仲間を登場させて以来、彼女の意見は定まっている。たしかに、私には物ごとを大げさに表現するタセがあり、「いよいよガンらしい」「どうやら糖尿病だよ。疲れて困る」などと打明け話してから、やはり寝こんだりもせず人生を楽しんでいるうち、竹内の方が痔の病いでひどい目に遭つたりするから、何となく「おかしいぞ」と判断するのは無理もな

い。

また、孔子様のように信念の道を歩む彼女のご主人とちがい、八方美人を念願とする（実際は、三方美人にもなりきれないが）私は、竹内のきらいな、竹内と反対の立場にある文化人とも喜んで交際していたりして、竹内が損をしているあいだに、こちらばかりトクをしているように見うけられるので、ズルイ説は動かしがたくなる。陸軍将校の娘として北京で教育をうけた彼女は、スケートもうまくて姿勢も正しい。ダンスは古風なタンゴが得意で、これまた古典派の埴谷雄高と二人でタンゴを踊っているところは、電燈を消してロウソクをともしたくなるほどだ。

そもそも彼女と竹内がなれそめのころ、彼女はある朝、私の女房に「わたし今度、アタマのはち割れそうな人と結婚するのよ」と告白した。うちの女房は階下の喫茶店に、彼女は階上の出版社に勤めていたからだ。ブスッと沈黙して他人を威圧する大頭の竹内好を形容するに、これにまさる名言があるうか。かつての流行語「竹内ヤメルナ。岸ヤメル」より、この方が深遠なる必死の発言かもしれないのだ。わが家では、ヌカミソの素と大根やナスの漬物は、もっぱら竹内家と埴谷家からいただくことにしている。ということは、ご両家とも、働き者の良妻に守られていることの証明なのだ。